2 月 2022

ネパール不動産バブル，日本人もビックリ！(5)

5. 不動産価格に日本人もビックリ

ネパールの不動産価格高騰は，ネパリタイムズ記事が批判するように異様であり，これには地価上昇に慣れているはずの日本人も驚いている。たとえば，こんな記事がある——

▼miyachika「ネパールに移住するなら知っておきたい，年々高騰し続けるネパールの土地事情」miyachika のネパール暮らし，2016/11/23 日

▼ネパール民宿 Katunje Diary「だから言ったじゃないの♪♪」2018/01/31

▼ネパール民宿 Katunje Diary「カトマンズで家を探す義弟」2018/01/23

▼ネパール民宿 Katunje Diary「カトマンズの土地転がし」2018/03/26

▼宮本ちか子「地価が異常な上昇をし続けるヒマラヤの見える都市で、家を持つために大家になる」R.E.port, 2020/2/1

たしかに，このところのネパール不動産価格の高騰は異様であり，私自身，驚きを禁じ得ないが，その一方，振り返ってみると，すでに前世紀末頃には，カトマンズ盆地の不動産はかなり割高となっていた。その頃，これは不動産バブルであり，いずれ破裂するに違いないと危惧した記憶がある。

ところが，それから早や四半世紀たつというのに，不動産バブルは膨らみ続け，一向に破裂しそうにない。

これでは，たとえ不動産ローン金利が 12%，あるいはそれ以上であっても，借金して不動産を買ったものが勝ちと多くの人々が考え，不動産投資に走るのも分からないではない。

不動産バブルはいつかは破裂するだろうが自分はその前に売り逃げられる——ネパールの不動産投機家たちも，かつての日本の同業者と同様，そう楽観視しているにちがいない。

Kathmandu View Tower Construction Sees Dismal Progress; 15 Percent Works In Five Years

■建設中の「カトマンズ・ビュータワー」。29 階建高層ビルとなる予定だが，反対も多い（Rising Nepal,2020/12/02）

谷川昌幸(c)

Written by Tanigawa 編集

2022/02/28 at 13:38

カテゴリー: ネパール, 社会, 経済

Tagged with アパート, バブル, マンション, 地震, 投機, 不動産, 住宅

ネパール不動産バブル，日本人もビックリ！(4)

4．不動産価格高騰の危険性

ネパールの不動産価格の高騰は，様々な問題を生み出している。重複もあるが，主にネパリタイムズ記事に依拠し，以下に列挙する。

(1)不動産ギャンブル

不動産価格高騰は，不動産投機を拡大再生産する。これは「不動産ギャンブル」であり，非生産的。ネパールのこの 20 年間の経済成長率は年4%だが，その多くが不動産によるもの。他の産業は見るべきほどの成長を示していない。庶民の金も不動産投資に回され，不動産価格は高騰，彼らは自分自身の住む家さえ買えなくなっている。

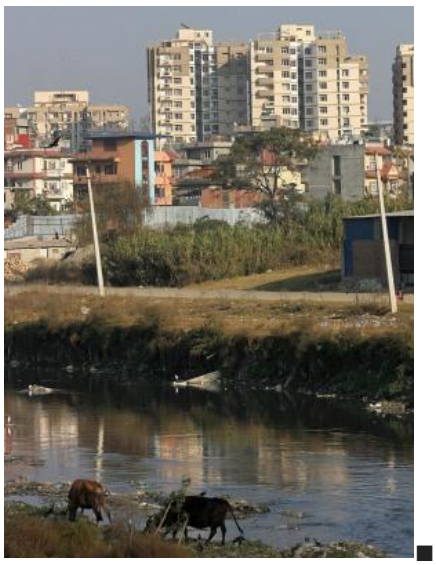
(2)汚職，腐敗の蔓延

政治家，官僚，裁判官，銀行員らは，不動産取引につき利益相反(公益と私益の対立)の関係にあるのに，そこに関与することにより巨利をえている。不動産価格高騰が，政官財の有力者の間に汚職・腐敗を蔓延させている。

(3)経済の不健全化

不動産所有者や不動産取引関係者は，短期間に億万長者となり，豪華 SUV など，ぜいたく品の輸入に拍車をかけた。国内産業は成長せず，貧富格差は拡大，外貨準備も減少してきた。

「この悪循環を止め，不動産投機ではなく生産部門へ投資するようにしなければ，ネパールの経済バブルは遅かれ早かれ破裂するだろう。」（Dill Raj Khanal，経済学者）

 ■新築高層マンション林立，手前はバグマティ川（パタン，2012/12/10 撮影）

谷川昌幸(c)

Written by Tanigawa 編集

2022/02/27 at 10:22

カテゴリー: ネパール, 社会, 経済, 政治

Tagged with アパート, バブル, マンション, 腐敗, 投機, 不動産

ネパール不動産バブル，日本人もビックリ！(3)

3．不動産価格高騰の主要因

都市部とその近郊の不動産価格が高騰し続けている主な要因は，ネパリタイムズ記事などによれば，以下の通り。

(1)1990 年民主化運動とマオイスト紛争

民主化運動成功後の自由市場社会化により人口流動化が始まったところに，マオイスト人民戦争（1996–2006）が勃発，紛争の激しかった地方から多くの人々が都市部に逃れた。紛争が終結しても紛争中に流入した人々の相当数が地方に戻らなかったのに加え，自由市場社会化の加速により地方から都市部への人口移動は増加し続けた。

近年の移入者比率は，バグマティ州（カトマンズなど）が 47.3%，ガンダキ州(ポカラなど）が 40.2%，第 1 州(ビラトナガルなど）が 38.9%。

(2)不動産取引の規制の甘さ
ネパールの不動産取引は，規制が甘く，銀行は大量の不動産融資をしている。庶民が預けた金も，不動産投資に回されている。
政治家，官僚，軍人，裁判官など，政官界有力者の多くは自身や縁者が不動産所有者であり，したがって，彼らの影響下にある政府や中央銀行(Nepal Rastra Bank)には，不動産取引や融資を規制するに十分な意思や能力を持たされていない。

(3)不動産取引税の低さ
市民所得税は最大 36%，法人所得税は 25%だが，不動産取引税は極めて低い。
土地取得後5年以内で売却⇒利益の 5%が税
土地取得後5年以上で売却⇒利益の 2.5%が税
また，不動産取引においては，関係職員を買収して取引額を低く見せ，課税額を引き下げることも行われているという。

(4)不動産マネーロンダリング
経済学者の Achyat Wagle 教授は，不動産マネーロンダリングを，こう批判している。「不動産は，不正に得た金の一時移転先として理想的なものとなったので，土地を必要としない人々までが土地に投資した。‥‥そして，働かなくても短期間で金持ちになれるので，不動産投機は起業意欲を失わせることにもなった。」(Nepali Times)
(5)農地の宅地転用
農地の細分化・宅地転用についても，大量の金で買収が行われ，規制法が改定された。その結果，2021 年だけでも，50 万もの新たな不動産所有証書が発行された。また，合法的な分割土地であっても，係官は土地取引手続きの際，賄賂を要求するという。

■10 年前撮影の新興住宅地

（カランキ付近，2012/12/10）

谷川昌幸(C)

Written by Tanigawa 編集
2022/02/26 at 10:11
カテゴリー: ネパール, 社会, 経済
Tagged with バブル, 都市化, 農地, 土地, 地価, 市場社会, 不動産

ネパール不動産バブル，日本人もビックリ！(2)

2. 給与・金利と不動産価格

ネパリタイムズ記事は，市街地や近郊の不動産価格の高騰を警告しているが，そこで暮らす住民にとって，それはどの程度のものなのか？　比較のため，現在の所得水準と銀行金利を見ておこう。

(1)平均給与

ネパールの実勢給与については，インターネットの職業紹介サイトが概観には便利だ。サイトごとにかなり大きな差があるが，以下，おおよその参考までに。

▼SALARY IN NEPAL（2022）[ルピー/月，$1=Rs120]

平均月収：大企業[57,456]　中企業[48,600]　小企業[29,160]　零細企業[16,200]

▼Salalies on position in Nepal(2022/02/22)[ルピー/月]

平均的給与（賞与込）[15,053～55,556]

職種別：行政[30,256]　教育[26,282]　農業[22,470]　商業[28,561]　旅行・ホテル[22,006]　自動車関係[28,380]　銀行[37,372]

▼Average Salary in Nepal 2022[ルピー/月]

全国平均的給与（手当込）[20,400～360,000]（全体の 25%が 47,000 以下，75%が 84,000 以下）

都市別平均的給与：カトマンズ[86,900]，ポカラ[80,700]

職種別：小学校教員[52,900]　中学校教員[67,800]　警官[45,800]　看護師[60,200]　歯科医[151,000]　土木技師[73,600]　プログラマー[76,700]　パイロット[142,000]　フライト・アテンダント[53,800]　ホテル・マネージャー[145,000]　弁護士[158,000]

(2)銀行金利

Nabil Bank(2022/02/13)

住宅ローン　12.00%　／　普通預金　6.03%　　定期預金（3か月以上）11.03%

他の銀行については，以下参照。Nepal Bank Ltd　Everest Bank Limited

(3)不動産価格

ネパリタイムズ記事では，不動産価格の実例が，いくつか紹介されている。

・パタンのアパート（ベッドルーム2）＝850 万ルピー

・パタンの小住宅用地＝1600 万ルピー

・バクタプルの道路沿いの土地＝20 年前の 70 倍の価格

・カトマンズ・ダルバルマルグの不動産（土地?）＝9 千万ルピー/33 ㎡

・カトマンズ・ティンクネの土地付き住宅＝8 千万ルピー（6 年前の 4 倍）

・カトマンズ・リングロードから 4 ㎞の土地＝5 年前の 5 倍の価格

不動産価格について，より “**real**” なのは，ネット広告。無数にある。たとえば，以下参照。Hamro Bazaar　Nepal Homes　Real Estate Nepal　Basobaas Nepal　99aana

▼不動産の販売価格例（Hamro Bazaar 2022/02/24）

◆住宅（土地付き）

- ラジンパト：3階建　土地 89.0 ㎡　1700 万ルピー
- ラジンパト：平屋　土地 286.2 ㎡　4000 万ルピー
- ブダニルカンタ：3階建　土地 116.4 ㎡　2800 万ルピー
- マハラジガンジ：2階建　土地 79.5 ㎡　1300 万ルピー
- テク：3.5 階建　79.5 ㎡　1750 万ルピー
- チェットラパティ：3.5 階建　土地 79.5 ㎡　2250 万ルピー
- マイティデビ：3 階建　土地 47.7 ㎡　1300 万ルピー
- カランキ：2 階建　土地 111.3 ㎡　1150 万ルピー
- ニューバネスワル：3 階建　土地 31.8 ㎡　400 万ルピー
- バクタプル：2.5 階建　土地 79.5 ㎡　860 万ルピー

◆アパート（マンション）

- ラリトプル：107.5 ㎡　1720 万ルピー
- ラリトプル：63.2 ㎡　1250 万ルピー
- ラリトプル：47.4 ㎡　890 万ルピー
- タパガウン：158.1 ㎡　3150 万ルピー
- カリマティ：35.3 ㎡　627 万ルピー
- ドゥンバラヒ：93.0 ㎡　1650 万ルピー

◆土地

- カランキ：95.4 ㎡　230 万ルピー
- カリマティ：101.8 ㎡　300 万ルピー
- カリマティ：435.7 ㎡　580 万ルピー
- スワヤンブー：127.2 ㎡　240 万ルピー
- ゴカルナ：349.8 ㎡　120 万ルピー
- ラリトプル：190.8 ㎡　129 万ルピー
- バクタプル：149.5 ㎡　120 万ルピー
- ブダニルカンタ：127.2 ㎡　250 万ルピー

■不動産広告 Real Estate in Nepal

谷川昌幸(c)

Written by Tanigawa 編集

2022/02/25 at 11:15

カテゴリー: ネパール, 社会, 経済

Tagged with アパート, バブル, マンション, 給与, 金利, 土地, 投機, 不動産, 住宅

ネパール不動産バブル，日本人もビックリ！(1)

1. Unreal Real Estate Prices: 非現実的な不動産価格

ネパールでは，不動産価格の高騰がなおも続いている。狂乱地価を体験した日本人から見ても，その様は，かつての日本以上に異様とさえ見える。「不動産バブル」といわざるをえない。
この問題につき，ネパリタイムズが長文の批判記事を掲載している。

Ramesh Kumar,"Kathmandu's unreal real estate prices;The urban property value bubble is artificial,and could spell an economic crisis if it bursts," Nepali Times,February 5,2022
タイトルは，「カトマンズの非現実的な不動産価格」。土地や建物は「現実の，不動の（real）」財産（estate）であるはずなのに，カトマンズではそれらが「非現実的な，夢のような（unreal）」価格になっている，というのだ。

では，どうなるか？ 「都市部の不動産価格は不自然な作為的バブルであり，破裂すれば経済危機を招くだろう。」

これは大変。日本では1980年代半ばからの不動産バブルが90年代初めに破裂，以後，長年にわたり日本は深刻な後遺症に苦しめられた。日本沈没の悪夢が正夢になりかけた。国力がそこそこあった日本にして，この有様。もしこれと同じようなことがネパールで起きたなら，日本以上に深刻な経済危機に陥るのではないか？

以下，他のネット情報も参照しつつ，ネパールの不動産取引について検討してみよう。

■Nepali Times,February 5,2022

谷川昌幸(C)

Written by Tanigawa 編集

2022/02/23 at 15:01

カテゴリー: ネパール, 社会, 経済

Tagged with バブル, 土地, 地価, 投機, 不動産, 住宅

紹介：安倍泰夫『ネパールで木を植える』(5)

5　大震災と森林による生活安全保障

ネパールでは，10 年に及ぶ人民戦争が 2006 年に終結，2008 年に連邦民主共和制となり，2014 年には制憲議会と政党内閣が成立した。ネパールが，この民主的新体制の下で生活の安定・開発促進へと向かい始めた矢先の 2015 年 4 月，ゴルカ地方を震源とする大地震が発生した。
この地震の被害は，死者 8964 人，被災者 500 万人余など，甚大であった。建物も，民家だけでなく寺院，学校，ビルなど，多くが全壊・半壊の大被害を受けた。

著者の植林事業地域でも，震源地が近かったため，甚大な被害が出た。トリスリ・バザールの町は崩壊，「植林センター」をはじめ村々の家屋の多くも倒壊した。が，植林した森は無事であった。

村人たちは，備蓄食料が失われてしまったので，森に植えたマンゴーやパパイヤの木の実を食べてしのいだ。森にはまた，水や再建用資材もあった。

「大地震で家が壊れても，森は不死身だった。根はしっかり土をつかまえ，水を保持する。泉が湧く。‥‥生長した木を使って被災者用の仮設も作られた。植林の効果は着実に現れている。」（300 頁）
日本でも，森林は，つい数十年前までは，村の生活基盤の一つであった。私の村でも，炊事用・暖房用のマキ，家屋新築・改築用木材，キノコ用ホダ木，売却・収益用木材など，ほとんどすべて自分たちが植林し育てた私有林や共有林から取ってきていた。そして水も田畑には山からの流水を，また自宅用には井戸水か，裏山の湧水をパイプで引き込むかして，使用していた。

もしあの頃，日本の山々がネパールのようであったなら，村の生活はネパールのそれと大差なかったであろう。水不足のため農業は過酷であり，子供であった私も，遠くの川まで毎日，灌漑用や飲用の水を汲みに行かされていたに違いない。

『ネパールで木を植える』を読むと，「外材」を無尽蔵であるかのごとく輸入し使い捨てにしている今の日本人の暮らし方が，自然に反し，「持続可能（sustainable）」ではないことがよくわかる。

日本の山々は緑豊かなように見えるが，現実には，山林の多くは手入れされることなく放置され，荒れるがままである。日本の山林も危機にある。本書は，私たち自身の日本の山々のことを考えるためにも，読まれるべきである。

■イラム（谷川 2015/01/28）

谷川昌幸(C)

Written by Tanigawa 編集

2022/02/10 at 18:37

カテゴリー: ネパール, 自然, 農業, 国際協力, 本

Tagged with 地震, 森林, 植林, 水利

紹介：安倍泰夫『ネパールで木を植える』(4)

4　内戦下で試される意思と胆力

『ネパールで木を植える』では，1998～2015 年の事業が主に描かれている。この期間には，マオイスト紛争（1996–2006 年），王族殺害事件（2001 年），大震災（2015 年）と大きな出来事が続き，ネパールは大混乱，人びとの生活は困難を極めた。そうした状況下で外国人が支援事業を継続するには，事業への強い意志と並外れた胆力が不可欠だ。
特に難しく危険であったと思われるのが，マオイスト紛争渦中での事業継続。

マオイスト紛争（人民戦争）は，内戦でありゲリラ戦であった。そこでは，当然ながら，戦闘地域・非戦闘地域の区分も，敵・味方の区分も，はっきりしない。ある村が昼間は政府支配下，日没後はマオイスト支配下ということもあったし，親族や友人・知人が政府側とマオイスト側に分かれてしまったり，あるいは誰がいずれの側か疑心暗鬼に捉われてしまったりすることもあった。そうした状況下で，外国人もつねに試されている。誰を信じ，どう事業を進めていくか？　これは難しい。

著者の植林事業地域も，内戦の「戦場」となった。交戦，狙撃，脅迫，リンチ，拷問，監視，検問，地雷埋設，「人民裁判」，住民拉致・思想教育，マオイスト徴税，等々。

そうしたなか，著者も危険な事態に幾度も陥った。国軍の厳しい検問を受ける一方，マオイストに狙われているともうわさされた。事実，数十人のマオイスト・ゲリラに取り囲まれ，灯油をかけられ，焼き殺されそうになったことさえあった。文字通り「命がけ」である。

それでも著者は，植林事業を継続した。ネパールの人々にとって植林は絶対に必要であるという大原則は堅持しつつ，実際の事業運営においては，その場，その場で驚くほど柔軟に方法を調整し，交渉を重ね，着実に事業を進めていった。

たとえば，情報漏れの危険を避けるため，マオイストについては「太郎」，「次郎」といった暗号名を付け，スタッフと話しをしていたし，マオイストからの「徴税」についても交渉をギリギリまで詰め負担することにした。まるでスパイ映画，このようなことが現実に行われていたとは，にわかには信じがたいほどだ。

そして，マオイスト幹部「太郎（ヒラナート・カティオラ）」に夕方，呼び出され，尋問されると，地域住民のための植林の大切さと，その事業が日本の子供たちの牛乳パック集めにより長年支援されてきたことを心を込めて理路整然と説明した。この著者の説明を「太郎」は黙って聞いていたが，徐々に表情は穏やかになり，明言はしなかったが，事業は黙諾されることになった。外国 NGO が脅されたり攻撃されたりして次々と撤退していく当時の危機的状況を考えると，これも驚くべきことである。

このように，マオイスト人民戦争のような混沌としたゲリラ戦のさなかでの行動には，いついかなる時でも，日本では想像もできないほどの緊張を強いられる。

私も，その頃のある日の夕方，郊外の村からカトマンズに戻る途中，「ナガルジュンの森」沿いの峠で検問に引っ掛かり，小銃を突き付けられたことがあった。全く初めての経験であり，心臓が止まるかと思うほど恐ろしかった。

また，別のときには，バクタプルの近くでバンダ（ゼネスト）に巻き込まれ，乗っていた車が棍棒と投石で襲われた。車を運転していた知人は猛スピードで逃げ，危機一髪，脱出することが出来た。このようなことは，人民戦争中は，いたるところで見られたのである。

著者の植林事業は，そのような困難な状況下でも継続された。著者の意思と胆力の強靭さには，誰しも驚かされざるをえないであろう。

■マオイスト拠点の一つであったゴルカの村（谷川 2009/03/19）

谷川昌幸(C)

Written by Tanigawa 編集

2022/02/09 at 10:24

カテゴリー: ネパール, マオイスト, 農業, 本, 人民戦争

Tagged with ゲリラ, ゴルカ, バンダ, 王族殺害, 内戦, 植林, 人民戦争

紹介：安倍泰夫『ネパールで木を植える』(3)

3　植林事業の大切さ

著者は，ネパールの山々の乱伐による荒廃と，それに起因する水不足・下痢蔓延を目にし，植林による森林再生事業に取り組んでこられた。30 年にも及ぶ事業で，100 万本もの苗木が植えられ，55 万本が活着，森林が広がっていった。地域住民の生活・健康はむろんのこと，大きくは地球温暖化防止の観点からも，その業績は高く評価される。

私がネパール山地の荒廃を目にしたのは，1980 年代半ばのこと。何の予備知識もないまま，初めてネパールを訪れた私にとって，ネパールはまるで神秘の国，驚きは想像をはるかに超えていた。

その一つが，山地の風景。文字通り「耕して天に至る」。日本の比ではない。丘や山は極限まで開墾され，田や畑になっていた。しかもなお，いたるところで伐採，開墾が行われている。

その結果，たとえば，どこに行っても急峻な山腹にはたいてい山崩れが見られたし，村々では女性たち—少女から老婆まで—が真鍮製の大きな水瓶を抱え，遠くの水場から休み休み水を運び上げているのに出会った。ヒマラヤをバックに絵にはなるが，見るに忍びない村の生活の現実であった。

こうした山地の開墾・荒廃はいたるところで見られたが，強く印象に残っている地域の一つが，著者の植林事業地トゥプチェ（トリスリバザール北方）の手前の「カカニの丘」周辺。

カカニは標高 2030m，カトマンズから北へ 25km 位。そこへ出かけたのは四半世紀前。道はまだ狭くデコボコ，車はオンボロだったが，それでも首都から遠くはない。そのカカニに向けカトマンズから出て目にした丘や山は，下からほぼ頂上まで見事に開墾され，田畑や住居地になっていた。しかも，わずかに残った森林でさえ，あちこちで伐採され開墾が進められていた。いまいけば，丸裸になっているに違いない。

カカニ～トゥプチェ地域の現状は，グーグル映像—乾季撮影であろうが—を見ると，おおよそ見当がつく。茶色の山地が大きく広がっている。

■カカニ～トゥプチェ地域。山地も開墾（グーグル地図 2022/02/06）

谷川昌幸(c)

Written by Tanigawa 編集

2022/02/08 at 10:42

カテゴリー: ネパール, 自然, 農業, 健康, 国際協力, 本

Tagged with カカニ, 開墾, 山林, 植林, 温暖化

紹介：安倍泰夫『ネパールで木を植える』(2)

1　運命的な「声」の導き：雪崩からの生還・少女との出会い・植林事業へ

著者を植林事業へと導いたのは，運命的な「声」であった。

1974 年 10 月，著者はラムジュン・ヒマール登山隊に医師として参加，6984m の山頂への登頂にも成功した。が，下山途中，雪崩に巻き込まれ，意識を失った。やがて意識は戻ったものの，高山病と降雪ホワイトアウトで先に進めず，極寒の雪原に横たわったまま身動きできなくなってしまった。

遭難死寸前。と，そのとき，「**イェタ**（こっち）」という声が聞こえ，起き上がると，前方にトンネルがあり，出口の先には登山隊テントが見えた。そのトンネルを通り，著者はテントにたどり着いた。そして，振り返ると雪が降りしきるだけ，そこにはトンネルはなかった。

幻聴，幻視だったのか？　が，たとえそうだったにせよ，まさにそれらにより著者は救われ奇跡的に生還できたのだ。

首都カトマンズに戻った著者は，帰国せず，現地小児科病院のボランティア医師として働き始めた。そして 1974 年暮れ，休暇中に出かけたランタン・ヒマラヤ偵察からの帰途，トリスリ河畔でテント場を探しているとき，チェットリの少女を見かけ尋ねると，「**イェタ**（こっち）」と言って案内してくれた。

著者は，「**ハッとした**」。「**雪原でのあの声**」とそっくりだ。

この少女，14 歳のドゥルガを，著者は養女とした。そして，それをきっかけとして，親族，知人，地域住民へと人間関係が広がっていった。

一方，著者は小児病院勤務を通して，子供の死の多くが汚染された川水に起因することを知り，清潔な飲料水を確保することの必要性を確信するに至った。そのためには，乱伐で砂漠化した山地に木を植え，湧水を回復しなければならない。

こうして著者は，運命的な「声」に導かれて生還し，少女ドゥルガと出会い，そして今日にまでも継続されることになる植林の大事業の開始へと向かうことになったのである。

■おび（表側）

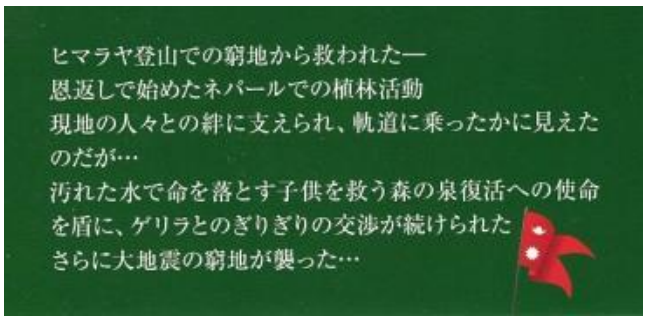
2　運命的な出来事と人生

『ネパールで木を植える』を読んでいると，合理的には説明しきれない運命的な出来事がその後の人生に大きな影響を及ぼすこともあることが，よくわかる。人生はドラマチックでもありうる。
私も早や「後期高齢者」。75 年の人生を振り返ってみると，著者ほどではないが，それでも「運命的」と思えるような出来事がいくつかあった。たとえば，穂高での遭難危機もその一つ。

数十年前の秋，上高地に行った。河童橋～明神池付近の散策が目的だったが，雲一つない晴天。そこで，つい魔が差して，軽装にもかかわらず穂高に登ることにした。ルートは岳沢小屋⇒奥穂高岳⇒穂高岳山荘。絶景にルンルン気分だったが，秋の空は急変，奥穂頂上まであとわずかのところで猛吹雪，身動きできなくなってしまった。極寒の中，じっとうずくまり，もうだめかと観念しかけたとき，突如，目の前に人が現れた。屈強な山男で，吹雪・積雪だがルートは熟知とのこと。お願いして，あとをたどらせていただき，無事，奥穂山頂にたどり着いた。山荘までは稜線沿いに少し下るだけ。文字通り危機一髪，九死に一生を得た。助けてくれた山男は，何事もなかったかのごとく，山頂から一人，歩き去った。

この穂高での山男との出会いは，植林事業に結実した著者ほどではないが，それでも私の人生において折に触れ思い起こされる運命的な出来事の一つとなった。

『ネパールで木を植える』は，それを読む人に，誰にでも多かれ少なかれ運命的な出会いや出来事があること，そして，それを忘れることなく自らに引き受け，それぞれの仕方で人生を誠実に生きる努力をすること，そのことの大切さを改めて思い起こさせてくれるのである。



■おび（裏側）

谷川昌幸(c)

Written by Tanigawa 編集

2022/02/07 at 14:01

カテゴリー: ネパール, 自然, 健康, 国際協力, 本

Tagged with 登山, 運命, 遭難, 植林, 下痢

紹介：安倍泰夫『ネパールで木を植える』(1)

安倍泰夫『ネパールで木を植える ドクトルサーブと命の水の物語』（信濃毎日新聞社，2022 年）が出版された。著者は医師で登山家。他に『ネパールの山よ緑になれ」（春秋社，2002 年）などがある。

この本では，1974 年ラムジュン・ヒマール登山のときの遭難死寸前からの奇跡的生還，カトマンズの小児病院ボランティア勤務，トリスリ河畔での少女ドゥルガとの運命的出会い，その出会いに導かれての地域住民との関係拡大・深化，そしてその機縁から始められたその地域での植林の事業的展開へと記述がすすめられていく。

本書のメインテーマは植林事業であり，筆致も全体的に抑制的だが，著者のネパールでの実体験そのものが日本では想像もできないほど緊迫し予見しがたいことの連続のため，植林事業の経過報告とは思えないほどハラハラ，ドキドキさせられる。もし仮に自分がこのとき著者であったなら‥‥と，感情移入すればするほど考えさせられ，興味深く読み進むことが出来る本である。

以下，いささか読書感想文的になるが，私自身の見聞も参考に供しつつ，本書を紹介していくことにしたい。

■表紙カバー

谷川昌幸(C)

Written by Tanigawa 編集

2022/02/06 at 15:53

カテゴリー: ネパール, 自然, 農業, 健康, 国際協力, 教育, 本, 人民戦争

Tagged with 開墾, 山林, 植林, 水